

世界教養学科 中期留学

プログラム区分	中期留学
主幹部署・問合せ先	世界教養学科
研修先国・都市名	オーストラリア・ブリスベン
研修先	グリフィス大学
プログラム概要	世界教養中期留学プログラムは、9 週間の語学研修と約 2 週間のインターンシップを含む 3 か月間の留学プログラムです。渡航前には「オーストラリア学習会」を実施し、同国の歴史や多民族社会の形成、教育制度、文化などを学びます。学生は興味のあるテーマを調査し、意見交換を通じて渡航先への理解を深めます。 オーストラリア到着後は、グリフィス大学付属英語学校（GELI）でレベル別の英語クラスを受講し、英語力を集中的に高めます。多国籍のクラスメートと交流することで、他文化への理解も深まります。その後、インターンシップ準備コースで、職場での注意点や企業研究を行い、実習に備えます。 現地企業での約 2 週間のインターンシップでは、専門的な英会話力や実践的なコミュニケーション力を養います。ストレスのある環境で働くことで、職業観や人生観を見つめ直すきっかけにもなります。 また、ブリスベンでは多文化共生を体験できる機会が多く、ホストファミリーとの生活は異文化理解を深める貴重な体験です。 この研修を通じて、自分のコンフォートゾーンを広げ、将来に活かせる経験が得られるでしょう。 
日程	出発予定時期：2026 年 8 月下旬 帰国予定時期：2026 年 11 月下旬 期間：12 週間
単位認定	最大 16 単位
他学科生の受入れ	可 受入れ可の他学科：国際日本学科
語学研修の有無	有
引率者の有無	往路のみ引率有
住形態	ホームステイ
その他	

体験記

世界教養学科 中期留学に参加して

氏名：分部悠翔（2025年度参加）

この中期留学を通して、語学力の向上以上に、自分から行動し、相手を理解しようと努力する姿勢の重要性を学んだ。留学前は、英語を正確に話せるようになることが一番の目的だと考えていた。しかし実際に現地で生活してみると、完璧な文法や発音よりも、自分の考えや気持ちを伝えようとする姿勢そのものが、コミュニケーションにおいて最も大切であると実感した。この経験は、教室の中だけでは決して得られない、留学ならではの学びであった。留学当初は、英語で自分の意思を伝えることに強い不安を感じていた。間違えたらどうしよう、相手に理解してもらえなかったらどうしようという気持ちが先に立ち、消極的になってしまう場面も多かった。しかし、現地の人々は私の拙い英語であっても、最後まで話を聞こうとしてくれた。その姿勢に触れる中で、「間違ってもいいから伝えようとする」ということが信頼関係を築く第一歩であると感じるようになった。ホームステイでの経験は、その学びをより強く印象づけるものだった。一軒目のホストファミリーでは、食事の量や生活ルールなど、日本とは異なる点が多く、戸惑うことが続いた。特に、自分が困っていることや不満に感じていることをうまく伝えられず、誤解が重なってしまったことが大きな原因となり、最終日には口論に発展してしまった。その時は非常に怖い思いをし、異文化の中で生活することの難しさを痛感した。この経験を通して、我慢するだけではなく、相手に分かる形で伝えることの重要性、そして文化や価値観の違いを前提として向き合う必要性を学んだ。一方で、二軒目のホストファミリーでの生活は、留学の印象を大きく変えるものとなった。家族全員が温かく迎え入れてくれ、休日にはさまざまな場所へ連れて行ってくれた。子どもたちとも一緒に遊び、日常的な会話を重ねる中で、自然と英語を使う機会が増えていった。「次にオーストラリアに来た時もおいで」と声をかけてもらえたことは、大きな自信となり、人と人とのつながりの温かさを強く感じる瞬間だった。困難な経験があったからこそ、良い出会いのありがたさをより深く実感できたのだと思う。学校生活においても、多くの気づきがあった。授業ではディスカッションやペアワークが中心で、自分の意見を積極的に発言することが求められた。最初は発言することに抵抗があったが、回数を重ねるうちに、自分の考えを持つこと、そして相手の意見を尊重しながら対話することの大切さを学んだ。また、授業後や休日には、友人たちとそれぞれの国の料理を作り合い、文化や習慣について語り合う時間を持った。食文化の違いや考え方の違いを知ることで、世界には多様な価値観が存在していることを実感し、自分の視野が大きく広がった。留学先であるBrisbaneは、都市でありながら自然が身近にあり、人々が穏やかで親しみやすい街だった。公園や川沿いの風景が生活の中に溶け込んでおり、忙しさの中でも心に余裕を持って生活できる環境が整っていた。そのような街で暮らしたことで、私自身も落ち着いて物事を考え、相手を思いやる姿勢を自然と身につけることができたと感じている。簡単なことばかりではなく、悩みや困難の方が多い留學生活だったが、それら一つ一つの経験が自分を成長させてくれた。自分から行動する勇気、相手を理解しようとする姿勢、そして異文化を受け入れる柔軟さは、今後の大学生活や将来社会に出た際にも必ず生かせる力である。この中期留学で得た経験は、語学力以上に、人としての成長を実感できた、かけがえのない財産である。さらに、この留学を通して自分自身を客観的に見つめ直す機会も多く得ることができた。日本にいる時は、周囲と同じ行動を取ることで安心していたが、海外では自分の意思を示さなければ存在していないのと同じであると感じた。そのため、小さなことでも自分で判断し、責任を持って行動する力が身についたと感じている。また、失敗した経験も含めてすべてが学びにつながり、挑戦すること自体に価値があると考えられるようになった。特に印象的だったのは、現地の学生たちが自分の将来について具体的なビジョンを持ち、それに向けて主体的に学んでいる姿勢であった。彼らとの交流を通して、私も自分の目標

を明確にし、それを実現するために必要なスキルや経験を積極的に身につけていきたいという意欲が高まった。また、多文化社会の中で多様なバックグラウンドを持つ人々と協働する経験は、グローバル化が進む現代社会において不可欠な能力であると実感した。この留学で得た気づきは、今後新しい環境に身を置いた際にも、自信を持って一歩踏み出す原動力になると確信している。

